

平成30年7月23日

一般社団法人関東学生アメリカンフットボール連盟理事会 御中

## チーム改善報告書（追加）

日本大学保健体育審議会アメリカンフットボール部  
部長 加藤 直



## 目 次

1	セミナー等の受講状況	1
2	検証体制	1
3	弊部選手との意見交換	2

## 1 セミナー等の受講状況

弊部より貴連盟に提出した「チーム改善報告書」第3の3(2)スポーツ倫理の周知徹底に記載した、平成30年6月27日から7月7日に開催されたセミナー等の受講状況とそれに対する選手の感想等について追記いたします。

弊部選手は、別紙一覧のとおりセミナー等を受講いたしました。そのうち6月27日のセミナーでは、150人中145人、及び7月1日のクリニックにつきましては、150人中133人が参加し、その感想を提出いたしました。(欠席理由は、就職活動、病欠、通院、U19代表合宿です。)

まず、6月27日の吉田良治氏による「スポーツマンシップセミナー」では、スポーツマンシップとは何かを、米国のNCAAでの取り組み等と比較し、講演いただきました。弊部選手たちは、学業との両立の重要性、スポーツマンシップの精神は人間性に通じていること、広い視野を持つことの重要性、スポーツを除くと何も残らないような人間にならないこと、また、最も重要なこととして、競技をするだけでなく、学業はもちろん、社会貢献、生活態度など生活していく上でのすべてのことがスポーツマンシップにつながっていることなどを学びました。

また、7月1日の飾磨宗和氏による「ショルダータックリングクリニック」では、シアトルシーホークスで取り入れている方法を、弊部選手たちが、座学と実践を通じて学びました。4年生の中には、クリニックの内容をすでに自主的に学んでいた者もありましたが、多くの学生、特にディフェンスではない学生にとっては、安全性と正確性とを兼ね備えた、正しいタックリングを学ぶ良い機会となりました。

上記セミナー及びクリニックを通じて、アメリカンフットボールに対する姿勢や適切なタックルの方法が学べたことは、選手一人一人の技術面及び精神面にとって大きな意義があり、今後も、弊部主導で継続的に実施してまいります。

なお、弊部選手たちの感想文を別紙にて提出いたします。

## 2 検証体制

再発防止策の実施状況を検証する体制として、以下の2つを考えております。

第一に、弊部の部長及び副部長による検証です。「チーム改善報告書」第2原因究明⑤のとおり、本件事件の一因は、スポーツ競技部の指導方針等の運営について、監督又はコーチから、競技部の部長及び副部長を含む保健体育審議会等に報告がなされていなかったことにあります。弊部は、このような状況を反省し、今後、弊部の部長又は副部長が、再発防止策の実施状況を含むチームの指導方針等の運営を適切に監査し、随時、保健体育審議会にこれを報告していく体制を整備いたします。

第二に、保健体育審議会による検証です。「チーム改善報告書」第3の1(3)のとおり、一部の再発防止策の策定及び実施に関し、弊部は、本学競技部全体を所管する「保健体育審議会」と協働しており、保健体育審議会が設置した「スポーツ競技部へのガバナンス及び競技部内紛争処理体制等の検討委員会」(以下「競技部ガバナンス検討委員会」といいます。)は、兼職の禁止や相談体制の改善等、本学競技部全体

を対象とした再発防止策を提示しております。競技部ガバナンス検討委員会が策定した再発防止策については、保健体育審議会が学内の関係部署と連携を図りながら実現を目指すとしており、再発防止策の検証に関しても、本学の設置した第三者委員会からの提言等も参考としつつ、保健体育審議会において、今後必要な体制を整えて参ります。弊部は、この体制のもと、再発防止策を真摯に実行してまいります。

### 3 弊部選手との意見交換

「チーム改善報告書」第3の2(3)のとおり、弊部は、弊部選手との意見交換を行い、その意見交換の場において、選手側から、選手が自主的にまとめた反省点、改善案、再発防止のための取り組みの共有を受けました。

選手が自主的に考えた反省点、改善案、再発防止のうち、代表的なものは次のとおりです。

- ・スポーツマンシップとフェアプレイ宣言
- ・私生活の態度・姿勢
- ・学生自らのチーム作り
- ・敵味方関係なく倒れた選手へ手を差し伸べる
- ・指導者との意識の差によるやらされている環境
- ・全員がフットボールに真摯ではなかった
- ・グラウンドから最寄り駅までの定期的な清掃・あいさつ
- ・授業態度や生活態度の改善
- ・公共交通機関でのマナーの改善

弊部は、選手たち自身がチームをどのように変革すべきか、本件事件のようなことを二度と繰り返さないためにどうすべきか、そして、加害選手の復帰のためには何をすべきかを真剣に考え、選手たちが自主的に部を運営できる環境を作るために、今後も選手の意見をくみ取りながら改革を進めていく所存です。

以 上